

縦横無尽 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(17) : タテ系の張力と織機の型式7 : 錘り機¹

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	286
ページ	58-60
発行年	2005-01-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5201

縦横無尽 タテとヨコ 色とカタチ のフィールドワーク 17

吉本忍

タテ糸の張力と織機の型式7

錘り機1



写真1 現代の錘り機による機織り
(ノルウェー、マンダレン：1995年)

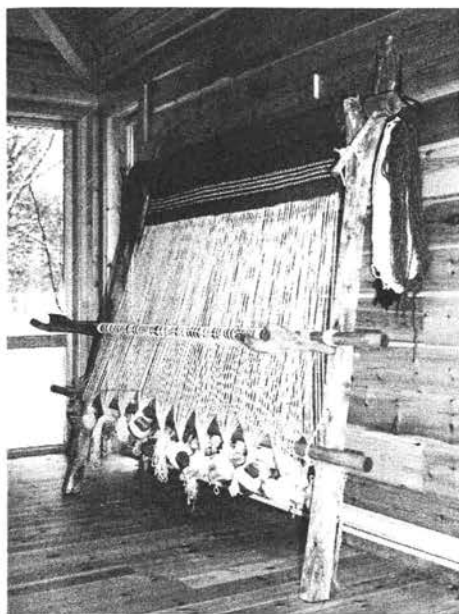


写真2 復元された第2次世界大戦以前の錘り機
(ノルウェー、マンダレン：1995年)

錘り機は、錘りを使ってタテ糸に張力を付与する型式の織機であり、英語では一般に warp-weighted loom と呼ばれている。ただし、そうした錘り機のうちには、錘りを使用したタテ糸の保持方式に、①タテ糸の一方を棒に固定し、他方を錘りでひっぱる方式、②タテ糸の一方を棒を構成している棒に固定し、他方を錘りでひっぱる方式、③タテ糸の一方を錘りでひっぱるといふタテ糸の保持方式をともなった錘り機を紹介する。

北極圏でのフィールドワーク

タテ糸の一方を棒に固定し、他方を錘りでひっぱるといふタテ糸の保持方式をともなった錘り機による機織りは、ノルウェー北部の北極圏に住むサーミ人のものでおこなわれている。サーミ人は、スカンジナビア半島北部からロシアのコラ半島一帯に住む、トナカイの遊牧や漁労をおもな生業としてきた、人口が5〜7万人と推測される少数民族で、その多くはノルウェー北部に住んでいる。わたしが錘り機を使用したサーミ人の機織りをはじめて目にしたのは、1993年1月の冬の季

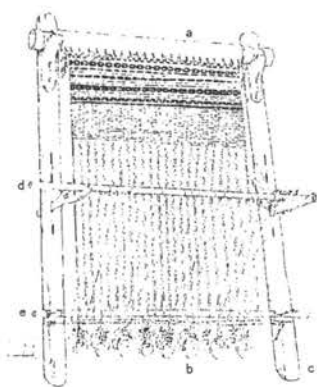


図1 第2次世界大戦以前の錘り機
("The Warp-Weighted Loom" より)
a-布巻き棒、b-錘り、c-支柱、d-綜絢、
e-開口保持棒

節のことで、ところはノルウェー北部のフィヨルドに面したマンダレンの町のサーミ伝統工芸センター (Hustfildsag) であった。この時期、太陽は昼前の11時ごろに南の山の上に姿をあらわすものの、昼過ぎの1時ごろには沈んでしまう。夏の白夜のときは逆に、1日のほとんどを夜が占めているという冬の季節の北極圏は、旅行にはまったく不向きである。そうした季節にあえてマンダレンまで出向いたのは、この年の9月から国立民族学博物館で開催した特別展「ジャワ更紗」の準備のためにオランダのライデン民族学博物館で資料調査をおこなう必要があり、オランダに行く前にマンダレンに立ち寄るべく旅程を組んだことによる。マンダレンはノルウェー北部の港町トロムソからフィヨルドに沿って約100kmの距離がある。1人でレンタカーを運転して吹雪のなかを往復し、現地での滞在時間はわずか3時間足らずという日帰りのあわただしい調査ではあったが、幸いにして目的の錘り機とその機織り作業を見ることができた。そして、その翌年の1994年8月と、翌年の1995年の10月から11月にもマンダレンに赴き、あらためて錘り機の調査をおこなった。また、1995年の調査のさいには、国立民族学博物館から同行したスタッフと

写真5 復元されたサーミの冬用テント
(ノルウェー、マンダレン：1995年)



写真3 手の指によるヨコ糸の打ち込み
(ノルウェー、マンダレン：1993年)

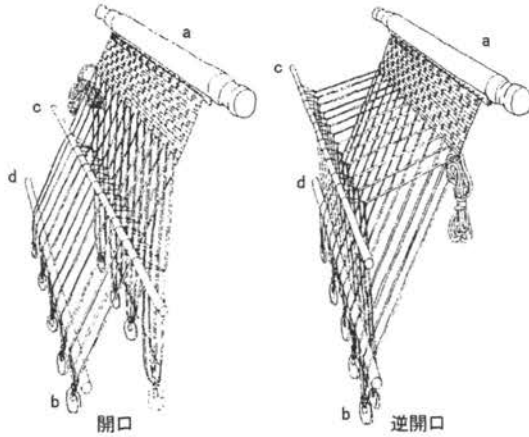


図2 錘り機の開口と逆開口
("The Warp-Weighted Loom" より)
a-布巻き棒、b-錘り、c-綜統、d-開口保持棒

写真6 サーミの織物の伝統的な模様
(ノルウェー、マンダレン：1995年)

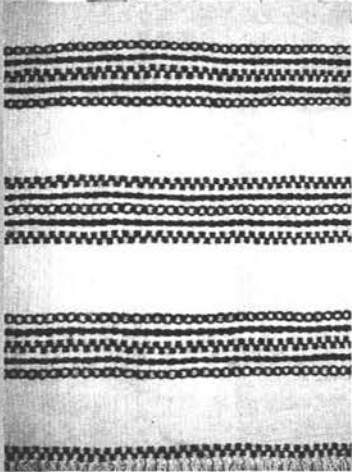


写真4 織り込んだヨコ糸の引き締め
(ノルウェー、マンダレン：1993年)

サーミの錘り機

もにビデオによる映像取材もおこなった。

サーミ人のもとでおこなわれている錘り機を使用した機織りは、今日においては、ごく一部の女性たちによって継承されているにすぎない。そうした機織り技術は、マンダレンでは、第二次世界大戦中の戦火のなかで家財とともに錘り機が焼失してしまったことから、一時期途絶えていた。しかし、1960年にサーミ伝統工芸センターの設立メンバーとなった4人の女性たちによって復興された、錘り機を使用した機織り技術は、少数民族であるサーミ人の伝統文化のひとつとして若い世代のあいだにも受け継がれて現在に至っている。

マンダレンに住むサーミ人のもとで使われている錘り機の部品には、タテ糸保持具として布巻き棒と20個あまりの石の錘りがあり、錘りはタテ巻き具としても機能している。そして、タテ糸間接保持具として布巻き棒の左右の端を乗せるための受け口をともなった機台、開口具として綜統と開口保持具がある。これらの部品で構成された錘り機は、室内の壁に沿わせて設置した状態で機織りがおこなわれており、機台の上部にわたされた布巻き具に一方を固定したタテ糸は下に垂らされて錘りに結ばれている(写真1)。また、タテ糸やヨコ糸にはウールの糸が使われている。なお、錘り機のタテ糸間接保持具として使われている機台は、直角三角形に組んだ木枠を二つ1組としたものであるが、このような機台は1960年以降に使われるようになったもので、第二次世界大戦以前は上部が二股になった2本1組の支柱を壁に立てかけて使った

いた(写真2)(図1)。また、緯打具は過去には使ったこともあると伝えられているが、今日ではタテ糸のあいだに5本の指を差し込んでヨコ糸の打ち込みをおこなっており(写真3)、打ち込まれたヨコ糸を必要に応じて、タテ糸の表側の糸(上糸)と裏側の糸(下糸)を左右の手でつかんで前後にひっぱり、織り込んだヨコ糸を引き締めるという操作もおこなっている(写真4)。なお、このような錘り機と先月号で紹介した垂直式や傾斜式の枠機は、機姿としては類似しているが、錘り機では、織り手は常に立ったままの状態では、織り手は常に立ったままの状態では、枠機では、ヨコ糸の打ち込みは下に向けておこなわれるが、錘り機では枠機のばあいとは逆に、上に向けておこなわれる。

サーミ人の錘り機による機織りでは、今日ではさまざまな色に染めた糸を使って、おもにタペストリーが織られている。しかし、かつては、おもにトナカイの遊牧のさいに使用するテントの覆い布(写真5)やカーペットとして使用されていた。また、それらの織物のタテ糸やヨコ糸としてもちいられてきたウールの糸は、羊の白い毛や黒い毛をそのまま紡いだ白や黒の糸、あるいは白い毛と黒い毛を混ぜあわせたグレーの糸が使われてきた。さらに、それらの糸で織られた織物の模様も、きわめて素朴なもので、直線状、ジグザグ状、あるいは鎖状の平織組織の縞筋(写真6)が、普遍的な模様として織りだされていた。

ヨーロッパを中心とした分布

世界の広範な地域でおこなわれてきた機織りのうちで、タテ糸の一方を棒に固定し、他方を錘りてひっぱりというタテ糸の保持方式

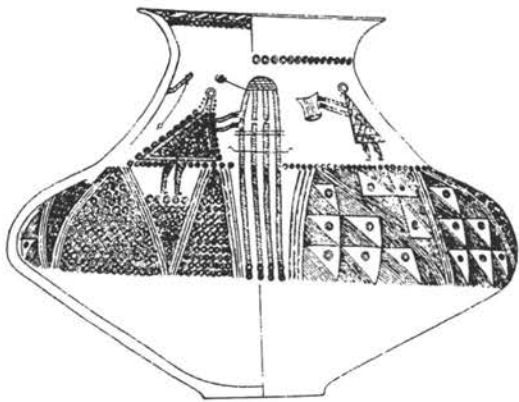


図5 ハンガリーのハルシュタット文化期 (B.C.800～400年頃) の壺に描かれた錘り機による機織り (“The Book of Looms” より)

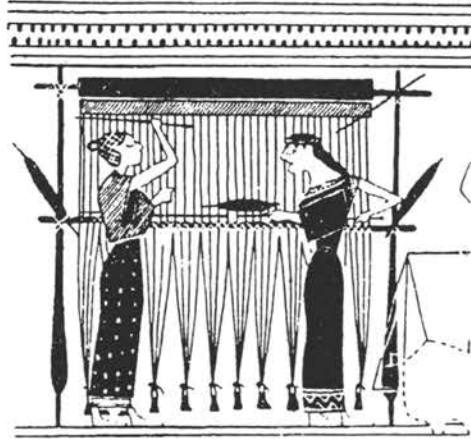


図3 B.C.560年頃のギリシアの花瓶に描かれた錘り機による機織り

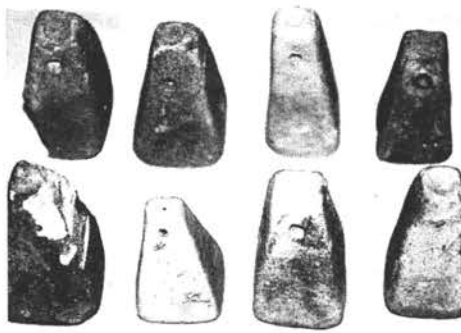


写真7 錘りの考古資料 (ウズベキスタン芸術アカデミー蔵/ウズベキスタン、タシケント：1999年)



図4 B.C.460～450年頃のギリシアの水差しに描かれた錘り機による機織り (“The Book of Looms” より)

をともなった錘り機は、現代においてはサーミ人のもとの使用が知られているに過ぎない。しかし、そうした錘り機は、最近まで一部のノルウェー人のあいだでも使われていたようであり、時代をさかのぼると古代から中世にかけてはヨーロッパのほぼ全域に分布していたことが、考古資料やさまざまな歴史資料によってあきらかになっている。それらのうちで、おもな考古資料としては、ギリシアの花瓶 (紀元前560年頃) や水差し (紀元前460～450年頃)、ハンガリーのハルシュタット文化期 (紀元前800～400年頃) の壺などに描かれた錘り機による機織りの図像 (図3～5) が知られており、石や粘土製の錘りもヨーロッパの各地から数多く出土している。したがって、このような考古資料やその他の歴史資料からは、錘り機がヨーロッパの原初的な織機型式であると考えられている。ただし、1998年以降にわたしがシルクロードでおこなってきた調査では、トルコ、コーカサス、ウズベキスタンなどの博物館において、それぞれの国で出土した、ヨーロッパの錘り機の錘りと類似した粘土製の錘りの存在があきらかになっている (写真7)。また、これらの国々では、来月号で紹介する予定の錘り機 (タテ糸の一方を枠を構成している棒に固定し、他方を錘りでひっぱる方式の錘り機) が普遍的に分布しているが、それらの錘り機で使われている錘りは、ヨーロッパの錘り機のものとは、形状、材質、大きさが異なっている。したがって、これらのことから、これまでヨーロッパにおける古い型式の織機と考えられてきた錘り機は、ヨーロッパのみならず、西アジアから中央アジアにかけても分布していた可能性が浮かび上がっている。

いる。

1995年10～11月にかけて、ノルウェーのマンダレンで取材した、サーミ人の錘り機を使用した機織り技術と、錘り機によって織られた織物を使用した夏用と冬用のテントについてのビデオ映像は、国立民族学博物館でわたしが制作監修して、長編番組「サーミ人の錘り機—北極圏にのこされた手織機」(48分)、「サーミ人とテント—北極圏に暮らす人々の伝統的な住まい」(52分)、および短編番組「サーミ人の錘り機」(20分)、「サーミ人とテント」(16分)を作成している。これらのうち短編番組は常設展示場でビデオテーク番組として一般公開している。また、写真1と写真2の錘り機や写真5の冬用テント、および夏用テントは、国立民族学博物館の標本資料として収集しており、これらについては近い将来に展覧会での公開を予定している。

(国立民族学博物館民族文化研究部教授)

よしもと・しのぶ

文献

Broudy, E.

1976年 *The Book of Looms*.

New York, Cincinnati, Toronto, London, Melbourne: Van Nostrand Reinhold Company.

Crowfoot, G.M.

1975 (1974)年 *Textile, Basketry and Mats*.

In C. Singer, E.J. Holmyard and A.R. Hall(eds.), *A*

History of Technology, vol. 1, London: Faber and Faber.

Hoffmann, M.

1974 (1964)年 *The Warp Weighted Loom*.

Oslo: The Norwegian Research Council for Science and the Humanities.

吉本 忍

1987年「手織機の構造・機能論的分析と分類」

『国立民族学博物館研究報告』12巻2号。